

私たちの暮らしは、気付かないところで地域の「つながり」に支えられています。今回は、さまざまな「つながり」の形について話を伺いました。

「向「う」三軒両隣」「ご近所にお醤油を借りに行く」…。そんなつながりを聞かなくなった今だからこそ、普段は気付かないその「つながり」に、少しだけ目を向けてみませんか。

特集 つながりが まちを強くする



暮ら しを 支 え る 地 域 の つ な が り



豊田東小学校の通学路には、暑い日も寒い日も、晴れの日も雨の日も、毎朝まちづくり協議会の皆さんが立ち、こどもたちの安全な通学を見守っています。

活動に参加する皆さんは「みんな孫と同じように思っています」と話し、こどもたちからは「いつも見守ってくれているから安心」という声が聞かれます。毎朝交わす「おはよう」のあいさつも、地域のつながりを育んでいます。

市内には、地域の人たちが力を合わせて活動するさまざまな団体があります。その主なものが「自治会」や「地域づくり協議会」です。現在市内では300の自治会があります。また、おおむね小学校区単位を基本として25の地域づくり協議会が、福祉や防災、交通安全、健全育成などを目的に活動しています。

自治会や地域づくり協議会は、どのような形で地域を支えているのか、その一例を紹介します。

災害への備え



避難所の運営や防災訓練を行うとともに、災害時の安否確認や、支援が必要な方の把握と避難計画の策定に取り組み、地域で支え合い、安心して避難できる体制づくりを進めています。

見守り・福祉



防犯灯の維持管理や、こどもの登下校の見守りを行い、地域の防犯に取り組んでいます。また、高齢者の見守りやサロンの運営などを通じて、孤立予防や健康寿命の延伸にも取り組んでいます。

「お互いさま」が広がる地域を目指して

私は、自治会と地域づくり協議会が両輪となって、地域を支えていると考えています。自治会は、住民の安全・安心な日々の暮らしを支える、最も身近な組織です。一方、地域づくり協議会は、地域の将来的な課題を見据え、それぞれの地域の特色に合わせた仕組みをつくり、未来につなげていく役割を担っています。

長野地域づくり協議会では、令和4年度に実施した中学生以上全住民アンケートで、住民が「高齢者福祉」に課題を感じていることが分かりました。そこで、みんなで話し合い、今年度から「いいじゃん長野お助け隊」という活動を始めました。生活に支援が必要な方を、有志のボランティアが、ごみ出しや買い物代行、話し相手などの形で支援する取り組みです。

活動を始めて5か月、一番うれしかったのは、認知症の母親を一人で介護する方を支援した際、『助けてもらっていいんだ』と初めて思えました』と言っていただけことです。

また、活動を続ける中で、支援者として小学生も参加してくれるようになって

りました。こどもたちが地域に目を向け、支え合う一員になってくれていることは、私たちが目指す姿の一つです。私たちが目指しているのは、「お助け隊」だけが支援するのではなく、近所の人同士が、困ったときに自然に声を掛け合い、支え合える地域です。

一方で、活動を支える担い手の高齢化や経済的な負担など、課題もあります。地域のつながりを大切にしながら、無理なく続けていける仕組みを考えていく必要があります。そのために協議会の地域交流部では、中間世代やこども達が地域づくりに関心をもつて積極的に参画できるような活動を模索し、実施しています。また、防災部ではアンケート結果から「自助」に重点を置き、女性や親子向けの防災講座を実施し、地域づくりに男性だけでなく女性の参画を目指しています。

こうした一つ一つの取り組みが、誰もが安心して暮らせる地域を形作っていくのだと思います。



長野地域づくり協議会 会長
長谷川トキ さん

地域の伝統・交流



こども会の行事や敬老会、お祭など、地域の行事を運営し、幅広い世代の方々が交流できる場をつくっています。

地域の環境づくり



地域の公園や道路などの草刈り、ごみ集積所や公会堂などの維持管理を行うことで、地域の環境美化や快適な暮らしの維持に取り組んでいます。

持続可能なつながり を目指して

暮らしや働き方の変化とともに、地域のつながりのあり方も変わっています。それぞれの新たなスタイルで、地域を支えています。



大泉町自治会長

ながしま たか き
長島 孝樹さん

若手自治会長も活躍

自治会長を引き受けた理由

「自治会の運営方法を変えられるのではないか」と思い、会長を引き受けました。

これまでの取り組み

以前は全戸参加で草刈りを行い、参加できない場合は2000円を徴収していましたが、役員を中心に「できる人が、できる範囲で」行いう形に変更し、徴収もなくなりました。

敬老会も、対象者が非常に増え、運営側も対象者となる状況や、参加者が一部に限られていたことから廃止しました。代わりに今年から、対象者全員にこどもたちからのメッセージと商品券をお渡ししています。

どちらの取り組みも好評で、多

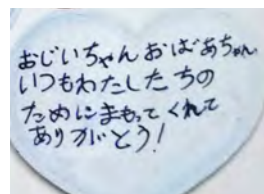
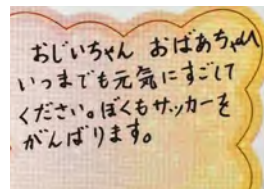
くの方から「よかった」と声をかけていただきました。変更に対処する声も予想していましたが、皆さんが協力的で、とてもありがたく感じています。

自治会運営で大切にしていること

これまでの活動や地域のつながりを大切にしながら、ただやめるのではなく、「無理のない形で続ける」ことを目指しています。

私が会長になってから、若い世代の役員も増えました。負担を減らすことで、働く世代も無理なく地域活動に関われるのではないかなと思っています。

自治会は、誰か一人が頑張るのではなく、それぞれができることを持ち寄って運営することが大切だと思います。無理なく参加できる仕組みをつくり、みんなで「この町、いいよね」と思える地域をつくっていききたいです。



▲こどもから高齢者へのメッセージ



少ない担い手でも 無理なく続ける

オープンチャットの導入

緑ヶ丘自治会では約4年前、災害発生時に地域の皆さんの安否を速やかに確認できる方法を作るため、LINEオープンチャットを始めました。現在では自治会加入世帯の約9割が参加しています。

だれにでも使いやすい仕組み

高齢の方にも使いやすいLINEを目指しています。8月の災害時安否確認の操作訓練では、操作が難しい方が公会堂に集まり、一緒に操作しながら方法を覚えていただきました。

また、LINEは防災だけではなく、



▲市が開催しているLINEに関する研修の様子



緑ヶ丘自治会長

たけうち ゆうじ
竹内 雄二さん

なく、自治会からのお知らせや、訃報など早急に伝えたい情報の配信にも活用しています。回覧板では間に合わない情報を迅速に共有でき、リマインドにもなるなど、さまざまなメリットを感じています。

無理なく続けられる自治会へ

LINEだけに頼るのではなく、回覧板や災害時には無事を知らせる黄色いタオルも併用しています。それぞれの良さを活かし、「誰も取り残さない自治会」を目指しています。

自治会運営でも、機器の活用や活動の見直しに取り組み、住民や役員の負担を少しでも減らせるよう、工夫を重ねています。「高齢化しても、少ない担い手でも、無理なく続けられる自治会」を目指し、変化を進めています。

つながりが 地域を強くする

災害時にも、地域のつながりは大きな役割を果たしていました。
今回は、記録的な大雨をもたらした、磐田市に大きな被害を与えた令和4年台風第15号の被災者と、支援に携わった方々にお話を伺いました。

令和4年9月23日の23時頃、

消防の方が家を探ねてきてくださり、別の場所へ避難するよう声をかけてくださいました。しかし雨がひどく、周辺も浸水していることが予想されたため、外へ出ることは難しいと判断しました。

翌朝、外へ出てみると、私がいた母屋のすぐそばの長屋から庭にかけて土砂で埋まり、車庫は流されてしまっていました。想像もしていなかった光景に、とても驚きました。

しかしその日から、大変ありがたいことに、地域の方々が土砂を掻き出す作業に来てくださいました。皆さん本当に一生懸命に作業してくださり、とても心強く、嬉しく感じました。

隣近所の付き合いが昔と比べて減ったと感じる今だからこそ、災害を経験したことで、地域とのつながりをもっと大切にしていかなければならない、絆を強くしていきたいと考えさせられました。



自宅が被災した
むらまつ おさむ
村松 修 さん



神増地区の復旧支援に携わった
むらまつ ようじ
村松 庸志 さん

私は当時、神増地区

災害対策本部の立ち上げに協力しました。情報班が各班の状況を吸い上げて情報を把握し、ボランティア班が必要な場所へボランティアを割り当てるなど、それぞれが連携して復旧支援を進めていきました。また、自治会内で普段から使用しているLINEなどのつながりも、スムーズな情報収集に役立ちました。

さらに、普段から祭りの役員として活動している地域の若者たちも、そのつながりを生かしてボランティアとして活動してくれました。こうした世代を超えた絆の強さは、神増地区の大きな魅力だと感じています。

日頃のコミュニケーションや地域のつながりが、いざというときの支えとなり、復旧の早さにもつながることを実感しました。

私は、土砂崩れにより通行でなくなった交差点で交通整理をしていました。さらなる土砂崩れが発生したので、すぐ近くの家々に安否確認しながら避難を呼びかけたり、消防隊が救出した足の不自由な方を、車椅子で公会堂へ移動させたりしました。また、公会堂に約100人が避難していると聞き、食事としてパンやおにぎりを買って届けました。

避難を呼びかけたり、助け合ったりした人たちは、普段から顔を合わせている地域の方々でした。特別なことをしているわけではなく、道であいさつをして、少しお話をすると、地域の行事に参加するとか、そういういた何気ないつながりが、人的被害を出さなかったことにつながったのかもしれない。

その後も多くの方にご協力いただき、大変感謝しています。



平松地区の復旧支援に携わった

きんばら よしたか
金原 好孝 さん

このつながりが

支え合う力を育む



今年、台風の被害が大きかった豊岡地区では「敷地夏祭り花火大会」や「おいでよ豊岡祭り」などのお祭りが行われ、多くの笑顔が集まりました。

日頃から顔を合わせ、声を掛け合い、楽しい時間をともに過ごす。何気ない日常の繋がりの中で、地域で支え合う力を育んでいました。

現代は、核家族化や共働き世帯の増加、インターネットの普及により、地域で顔を合わせる機会が減っていると言われています。一方で、世界中では予測できない災害が頻発し、また子育てや病気、日々のちよつとした困りごとなど、誰もが誰かの支えを必要とする場面があります。

そんな今だからこそ、身近な人と声を掛け合い、支え合える地域のつながりについて、今一度考えてみませんか。

